

## 20 キウイフルーツ

### (1) 生産目標

品種・系統	10a当たり収量	精果率	目標果実重	糖度
ヘイワード	2,500kg	90%以上	M果以上 (100g)	採收期 6.5~7.0以上

### (2) 経営指標及び労働時間

経営指標 (10a 当たり)

① 出荷量 (kg)	2,250	(H22-R1の平均)
② 販売単価 (円)	408	
③ 粗収益 (円)	918,000	
④ 経営費 (円)	399,922	
⑤ 農業所得 (円)	518,078	

#### ア 販売単価の推移

(単位: kg 当たり円)

年次	H22	23	24	25	26	27	28	29	30	R1
単価	410	382	353	347	425	613	414	370	369	398

(全農山口扱い)

#### イ 経営費の内訳

(単位: 10a 当たり円)

費用	金額	備考
肥料費	64,935	・販売費用内訳 選果経費 51,750 包装資材費 15,750 運賃 22,500 手数料 24,750
農業薬剤費	12,304	
光熱動力費	5,760	
諸材料・小農具費	32,970	
修理費	23,343	
償却費	127,660	
販売費用	114,750	
管理費用	18,200	
合計	399,922	

#### ウ 投下労働時間 (10a 当たり)

##### (ア) 月別労働時間

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
20.0	13.5	3.4	5.4	48.8	21.8	11.4	9.4	3.4	3.4	37.0	20.0	197.5

##### (イ) 作業別労働時間

整枝 せん定	施肥	土壌 管理	水管理	摘蕾 (果) 受粉	新梢 管理	防除	採収 出荷	計
60.0	8.0	5.5	20.0	40.0	15.0	14.0	35.0	197.5

(3) キウイフルーツ重点指導事項

事 項	推 進 内 容
1 高品質果実の生産	<p>1 棚面管理の徹底</p> <p>過繁茂は低糖度、貯蔵中の早期軟化、病害発生のみならず、母枝の充実不良、ひいては、翌年の生産不安定へと結びつく。したがって棚面新梢管理を徹底し、夏期棚下相対照度を10%程度は保つ。</p> <p>(1) 夏期不要枝(徒長枝等)のかぎ取り、遅伸び枝の摘芯、切り返し、強勢枝の切り返し。</p> <p>枝梢構成 (1㎡当たり)</p> <p>結果母枝数           3本</p> <p>芽数                   15～20芽</p> <p>結果枝数             9～11本</p> <p>着果数                25～30個</p> <p>2 早期摘蕾、摘果と着果調節</p> <p>早期の摘蕾、摘果により大果を生産するとともに着果量を調節し、高糖度果とする。</p>
2. 花腐細菌病対策	<p>1 耕種的防除の徹底</p> <p>(1) 過繁茂にならないようにする。(新梢管理)</p> <p>(2) 園内の通風や採光を良くするように園地環境を改善する。</p> <p>(3) 施肥改善や縮間伐を行い好適な樹相に改善する。</p> <p>(4) 環状はく皮は効果があるが、処理時期を誤らないことと樹勢が衰えないように注意して行う。また、かいよう病等の細菌病の伝染を助長するので注意する。</p> <p>2 適期薬剤防除</p> <p>発芽前散布と生育期(4～5月)散布により防除をはかる。ただし、薬剤散布だけでは効果不十分なので、上記耕種的防除と合わせて行う。</p>
3. 土づくり	<p>1 水田転換園では特に排水をよくし、有効土層40～50cm以上になるよう塹壕式改良をする。</p> <p>2 土壌pH6.0～6.5が好適酸度であるので調査し適正石灰量を施用する。</p> <p>3 有機物、完熟堆肥を10アール当たり1～2t施用し土づくりをする。</p>

(4) キウイフルーツ作業

月	旬	生育状況	作業名	作業の内容
1月		休眠期	棚の補修 防風施設の整備 接木	棚張線の締め、支柱の補強を行う。 新梢の折損、傷葉果等の風害を受け易いので防風垣の設置や補強する。 溢液期になる前の1月中に行う。
2月		溢液期	苗木の春植え	2月下旬～3月上旬が適期、排水と深植えに注意する。
3月	上～下	発芽期	春肥施用	年間施肥量の20%(N)位施す。
4月	上～中	展葉期 新梢伸長期	晩霜対策 芽かき 環状はく皮	新梢が5～8cm位伸びた頃が適期であり、夏季まで随時行う。1㎡当り新梢数10～12本程度確保する。 花腐細菌病多発樹では、開花約1ヶ月前に5mm幅で地際から60～150cmの主幹部に施す。
5月	上～下	開花期	新梢の誘引・ねん枝 摘蕾 (摘花) 人工受粉 夏肥施用	直立の結果枝等は突風で折れやすいので5月から基部を捻枝して、枝の重なりをさけ、枝の間隔を保つように誘引する。 側蕾、奇形蕾、短果枝の蕾、傷害蕾等を摘除し、その後1㎡当り35～40蕾位に調整する。 (1㎡30～35花に調整する。) 採薬は開花直前の正常な花をとり、開薬は温度20～25℃、湿度50%で行う。受粉は晴天、無風の日に進行。花粉は受粉直前に石松子で10～20倍に希釈し使用する。 年間施用量の20%位、樹勢を見て施す。

6月	上 中 下	果実肥大盛期 結果枝伸長 停止期	摘 新梢の摘芯・誘引 排水対策 夏季せん定	果 策 定	摘果は果実の形が確認できる頃(落花後約2週間後)から行い、葉果比6(1㎡当り25~30果)とする。 生育の強い新梢の基部を捻枝し誘引する。新梢の先端部が巻き付き始めたら摘心を実施し、過繁茂にならないように新梢を配置する。 梅雨期の停滞水は特に注意する。 棚面の日照不足は落葉、果実品質の低下につながる所以で不用枝は間引きする。樹間内にこもれ日が入るようにする。 良質花粉を得るため、雄木についても過繁茂にならないように新梢管理をする。			
7月	上 ~ 下	花芽分化始	敷 仕 か	ワ 上 ん	ラ 果 水	土壌水分保持のため、除草し、畝を主体に敷ワラをする。 小玉果、局部の結果過多など、見落とし部分のないように全体の結実を調整する。 梅雨明け後7~10日より早めに適正かん水する。		
8月	上 ~ 下	新梢伸長期	台 枝	風 の	対 整	策 理	防風垣の補修や棚の補強など事前に行う。 棚面の日照を確保するよう重なり枝、徒長枝、巻枝等をせん除、または摘芯する。	
9月		果実充実期	排	水	対	策	秋雨による湿害を防ぐため溝を掘り上げるなど行う。	
10月			秋	肥	施	用	年間の施用量の20%位施す。	
11月	上 ~ 下	果実成熟期	収 貯	穫	期 蔵	追 元	熟 用	糖度6.5~7.0以上で収穫を開始する。午前中の気温の上がらないうちに採取、日陰におく。 傷果、病虫害被害果、日焼け果、奇形果、偏平果を選別する。 短期の貯蔵には常温貯蔵庫で2~3ヵ月、中期貯蔵では貯蔵温度5℃で4~5ヵ月、長期貯蔵では、1~2℃で6~7ヵ月の貯蔵が可能。ポリフィルムで果実を包み湿度90~95%で行う。 低温貯蔵庫で貯蔵すると追熟を遅らせることができる。
~ 12月	上	落葉期 休眠期	苗 整	木 枝	秋 せん	植 定	え	植栽距離6×5mとする。排水を徹底し深植えをしない。 基本樹形は、2本主枝の一字仕立てとする。長さ1m程度の結果母枝3本/㎡を配置し、側枝の3年以上のものは更新する。1月末までにやり終える。

(5) 施肥基準

ア キウイフルーツ（成木）10a 当たり施用量

施肥時期	時期別割合 (%)			成分量 (kg)			施肥上の注意
	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	
元肥 (11月中旬)	40	60	50	8.0	9.6	9.0	(1) 成木園10a当たり収量2,500kgを基準とする。 (2) 堆肥、稲わらなど有機物資材を1t以上施用する。 (3) 10a当たり栽植本数を30本程度とする。
春肥 (3月上旬)	20	—	—	4.0	—	—	
夏肥 (5月下旬)	20	—	20	4.0	—	3.6	
秋肥 (9月上旬)	20	40	30	4.0	6.4	5.4	
計	100	100	100	20.0	16.0	18.0	

イ キウイフルーツ（幼木）10a 当たり樹齢別施用成分量 (kg)

樹齢	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	施肥上の注意
未結果樹	10	7	9	
結果若木	15	12	14	

(6) キウイフルーツ品種特性表

品種・系統名	原産地及び来歴	果実の特性	樹の特性	栽培上の注意事項	収穫期
ヘイワード	ニュージーランド種苗園主ヘイワード・R・ライト氏1920年発見 偶発実生 1930年 紹介	果実は大きく100g程度、果形は広楕円形で偏平なものが多い。 花は大きく花弁基部は互いに重り、花柱は曲がり強い。 果肉は緑白色を呈し、甘味、酸味のバランスがよく品質的には良い。また貯蔵性は特にすぐれている。	樹勢はやや弱く、樹冠の広がりはやや少ない。 成葉は大きく、濃い。 葉身表面の凸凹が強い。		11月上旬